



フィヨルドランド初の海中展望台へようこそ。こちらのパンフレットでは、水面下で見られる主な生き物を紹介しています。さらに詳しく知りたい方は、受付にてお問い合わせください。

クモヒトデ

細長い腕を持つヒトデ。クロサンゴの枝の周りにコイル状にしっかりと巻き付いているのが見られます。サンゴに安全な隠れ場所を提供してもらうかわりに、サンゴに付着する藻やゴミの掃除をしています。



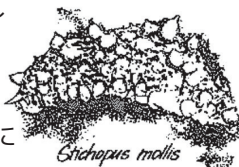
黒サンゴ

黒サンゴは植物のような形をしています。黒色の硬い骨軸を有するごく小さなイソギンチャクに似た白い動物の集合体です。通常は深海に生息するため、このような浅い場所で見られるのはごく稀です。



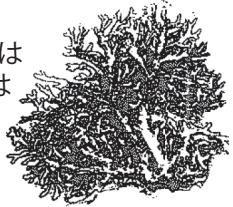
ナマコ

柔らかい芋虫のような外見からは想像しにくいですが、ヒトデやウニと同じ棘皮(きょくひ)動物の仲間です。食べ方は子供が指を舐める動作とよく似ており、粘性のある触手の先に餌を付着させ口に運んで食べています。



赤サンゴ

黒サンゴと同様、フィヨルドランド以外では通常深海に生息しています。黒サンゴとは違って、骨格は石灰質で壊れやすい性質があります。



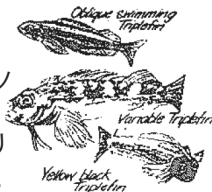
ランプシェル(腕足動物)

腕足動物はおよそ6億年前の古代の海で繁栄した生き物です。二枚貝に似ていますが貝の一種ではありません。日本近海にはシャミセンガイという仲間がいます。フィヨルドランドほど浅い場所での生きた化石を見られる場所はなかなかありません。



トリプルフィン

ミルフォード・サウンドにはヘビギンポやイソギンポの仲間が数種類います。非常に縄張り意識が強く、外洋へ出て行くことはまずありません。単体が対でいることが多いようです。オブリークトリプルフィンのみが群れを形成します。



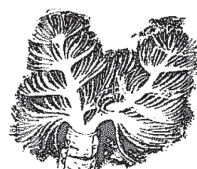
ウニ(マオリ名キナ)

ウニは水面下わずか数メートル以内の岩場で藻類を餌として生息しています。フィヨルドではそれより深くなると海藻の生育に必要な光が届きません。とげとげした固い殻に覆われていますが、幼生は魚やクレイフィッシュに捕食されます。



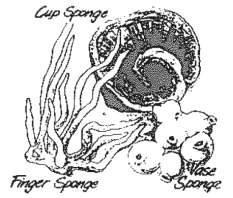
ハオリムシ

体を守りつつ固定する筒を形成するので、英語ではチューブワームと呼ばれています。先端からエラのような突起を出して養分を含んだ水を取り込んでいます。突起はとても敏感で、わずかな変化に反応して隠れてしまいます。



カイメン

フィヨルドの海には、形や大きさ、色の異なる様々なカイメンがいます。いずれも表面に多数ある小孔から水を取り込み、餌となる微粒子や微生物をろ過してとらえています。



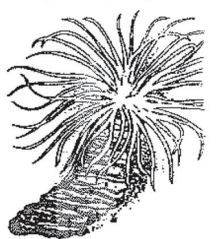
ウミユリ

ヒトデを逆さまにしたようなウミユリは、3億年ほど前の海で繁栄した古い生物の生き残りです。シダの葉のような形状の腕を広げて餌をとらえたり移動したりします。



ハナギンチャク

イソギンチャクに似た生き物で、羊皮紙を丸めたような管の中に体を収めることができます。長い触手を広げ、刺胞を銚のように使って獲物に刺し、捕食します。ハオリムシと同様、わずかな刺激に反応して触手を引っ込めてしまいます。



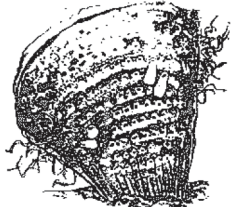
ヒトデ

岩場ではマッスル貝を捕食しているヒトデがよく見かけられます。ヒトデは腕の力で貝殻を引き離してから、胃を体外に出して貝の中の獲物を包み込み、消化液を使って分解を始めます。食事が終わったら、胃ごと飲み込むようにして体内に戻します。



ホースマッスル

ハリソン・コーブの岩棚や海底の砂泥の中に一部埋まった状態で見られる、大型の二枚貝。タイラギ(平貝)の仲間です。貝殻はしばしば他の植物や動物に付着しています。



スポッティ(マオリ名パケティ)

ニュージーランドの沿岸域でも特によく見られるベラ科の魚。孵化時はすべてメスですが、体長が20cmを超えるとオスに変わり、体表の斑点が消えます。



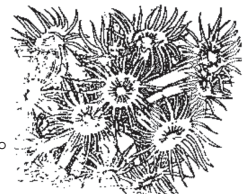
パーチ

バタフライパーチ(モンツキハナダイ)はこの辺りで泳いでいる姿がよく見られます。シーパーチはユメカサゴの仲間、砂泥の下に隠れていることが多いようです。いずれもエビや小さな甲殻類を餌にしています。



スナギンチャク

黄色いヒナギクのような触手は一見イソギンチャクのようなですが、スナギンチャクは別の目に属する生物です。スナギンチャクは骨格を作らず、共肉の上に群体を形成します。

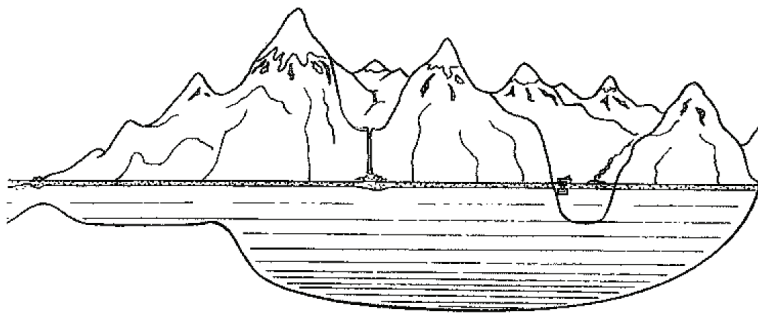
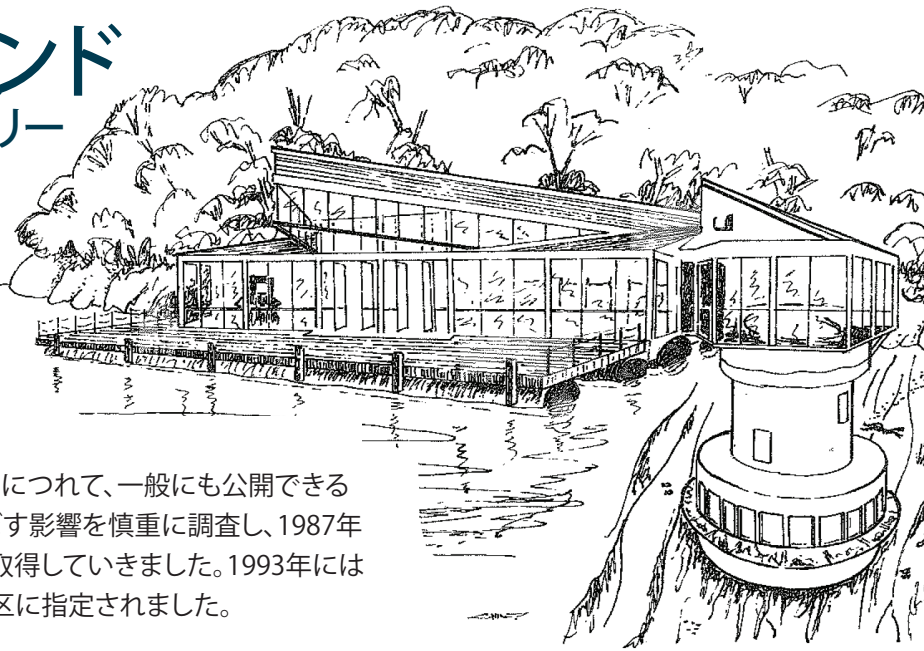


ミルフォード・サウンド アンダーウォーター・オブザバトリー

沿革

アリスティア・チャイルドとジョイス・リチャードソン博士、アーサー・ティンダルの3氏がミルフォード・サウンドに海中展望台を設置することを発案したのは1985年のことでした。完成は1995年の12月。建設に10年を要することになるとは、当初は誰も想定していませんでした。

科学調査を目的に始まったプロジェクトは、進行するにつれて、一般にも公開できる教育施設を目標とするようになりました。環境に及ぼす影響を慎重に調査し、1987年から1995年にかけて各方面の関係機関から許可を取得していきました。1993年には世界遺産登録に伴い、フィヨルドの北側が海洋保護区に指定されました。



ハリソン・コーブ

海中展望台はハリソン・コーブのウィリアムソン・ポイントにあります。懸谷に浸水してできた入り江はフィヨルドにつながっています。展望台付近の水深は100m。フィヨルドの海底では最も水深の浅い領域で、唯一の天然の良港となっています。

建設

建設作業は1995年1月に始まりました。まずはハリソン・コーブの岩盤にコンクリート製の柱を3本立てました。観察エリアになる部分はインバーカーギルのEタイプ・エンジニアリング社が手がけ、玄関部分はミルフォード・サウンドのディープウォーター・ベイソンで組み上げられました。

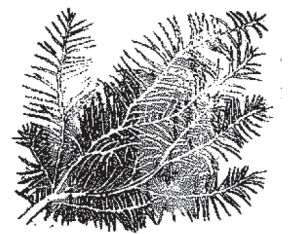
この2つの主要構造を現場まで牽引したわけですが、重量が450トンもある観察エリアをブラフからフィヨルドランドの沿岸を運ぶ作業は特に難しく、80時間もかかりました。

展望台は4つのポンツーンの上に設置されています。さらに、岩盤に特殊なアームで接続することにより、水位に応じて柔軟に上下できるように工夫されています。

フィヨルドの成り立ち

ミルフォード・サウンドは氷河の作用で造られたフィヨルドです。最終氷河期に氷河が後退し、海水が入り込んで現在のような地形になりました。フィヨルドの水深は約300mと非常に深いのが特徴です。また、外洋と接する開口部の幅が狭いだけでなく、氷河が後退した際に残されたモレーンも水流の妨げとなるため、波の影響はほとんど受けません。

年間7000～9000mmもの雨が降る地域なので、フィヨルド内は上層に淡水、下層に海水が溜まるという構造になっています。タンニンを含む淡水層は光を通しにくい性質があり、下層の生物相に影響を及ぼします。浅い場所で深海生物が見られるのは、フィヨルドの水面下がこのようなユニークな環境になっているためです。



southern
discoveries

ミルフォード・サウンドの体験を共有しましょう
#milfordsound #southerndiscoveries



0800 264 536
southerndiscoveries.co.nz